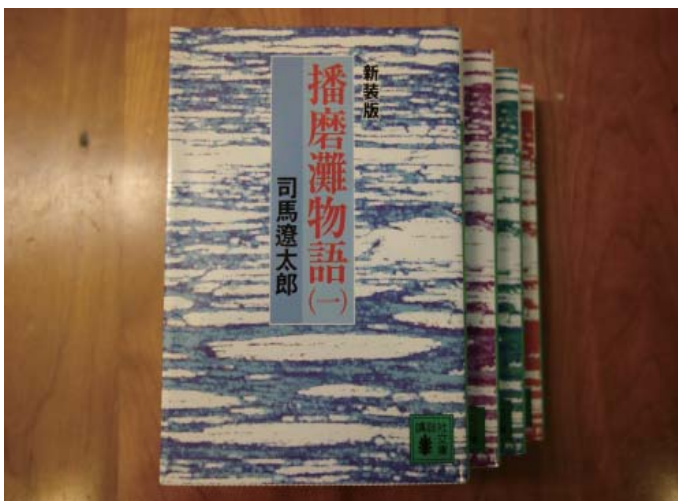


官兵衛と英賀合戦

最近、メディアからのインタビュアーが多くなつた。ご存じのように、NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」の企画がその原因である。本徳寺でも、この官兵衛ブームを背景に、二〇一三年一月に亀山御坊楽市楽座実行委員会の主催で、「軍師官兵衛と仏教」と題して、フォーラムが開かれた。私と書写山・円教寺の大樹執事長との対談に多くの方が大広間に参集され、熱心に傾聴しておられた。「官兵衛と仏教」という切り口はシツクリこないが、この播州においては多に意味がある。その背景は多少複雑である。

もともと、播州の本願寺勢力を代表する本徳寺と天台宗・円教寺とはお互いに反目し合っていた。しかし、武力をもって天下を目指す、信長・秀吉の武勢が台頭し、新・旧の仏教勢力に対して共通の敵となった。敵の敵は味方という理屈



播磨灘物語・全4巻

司馬遼太郎が秀吉側の軍師・黒田官兵衛を主人公として播磨の一向勢力と信長・秀吉との攻防を描いた4巻からなる歴史大作である。これによって、軍師官兵衛の人物が世に知られるようになったと言われている。

で、とりあえず信長方の軍師・官兵衛を語る資格があるという訳だ。

もつとも、官兵衛を歴史に登場させたのは、あの有名な歴史作家・司馬遼太郎の「播磨灘物語」である。そこでは信長・秀吉と正面から対峙した一向宗(本願寺門徒宗)を相手に戦った秀吉の軍師・官兵衛の活躍がイキイキと描かれていたからである。

後日談ではあるが、司馬遼太郎(福田定一)の先祖は「福田家」で播州・英賀の出身であったことが本徳寺の寺内寺の過去帳からも明らかになった。司馬遼太郎は遠い先祖に思いを馳せ、何かに押される思いで大作「播磨灘物語」をものしたに違いない。その当時、播州での本願寺の拠点英賀は同時に本願寺の同盟・毛利氏の拠点でもあった。以下に、筆者が七年前に、バンカル NO.60 2006年夏号 神戸新聞総合出版センター「英賀御堂と亀山本徳寺」で論考した一節を引用して播州における石山戦争の顛末をご紹介しよう。

一五七〇年九月、信長による本願寺立ち退きの要請を拒否した顕如は、諸国門徒に蜂起を指令、十年にわたる石山戦争を開始した。この時、顕如より本徳寺をおして三木通秋に出兵の要請があり、三木源右衛門専時以下分家人二百余人、一向信徒五百余人、地侍三百余人ならびに兵糧米三千俵を以て参戦し、多くの戦死者が出た。この痛手は英賀衆にとつては大きく、以後、後方支援を余儀なくされた。一五七七年には毛利軍勢が上陸、英賀の防衛を強化している。

信長の本願寺ネット攻略は一進一退しつつも、三河・越前・近江・伊勢長島の陸一揆を壊滅させ、本願寺包囲網は徐々に狭められていった。一五七六年以降、東方陸からの援軍は絶たれ、本願寺は籠城を余儀なくされ、戦局はもっぱら海に遷った。つまり、瀬戸内海の制海権の争奪が勝敗を決することになったのである。

この危機を打開すべく本願寺の同盟・毛利氏は、一五七六年七月に信長の水軍(摂津・和泉)による包囲網を大阪湾で撃破し、本願寺への物資の供給を成功させた。

この作戦行動に英賀は中継基地としての役割を担っていた。しかし、その主力部隊は海の一方向門徒・三島村上一族であったことは言うまでもない。村上一族はその支配を芸予諸島に置く自立性の高い海の統領で、毛利氏が一向宗を尊重していたこともあり、毛利水軍の主力として活躍していた。しかし、翌年には信長が九鬼水軍に鋼装船を新造させて、大坂木津川口の戦いで毛利水軍を大敗させた。これ以降、内海の制海権が信長方に移ることになった。これによって、秀吉の播磨攻略が可能となったのである。

一五七八年、秀吉は書写山・十地院に陣を張って、本願寺・毛利方にあった三木城を別所長治の自害をもって潰し、播磨の一向宗の拠点英賀を眼下にとらえた。既に、英賀衆は別所氏への支援、織田方小寺氏との戦闘で消耗し、一五七九年、顕如から英賀衆に届けられた檄文に呼応できる戦力はすでになかった。英賀攻略は一五八〇年四月に開始され、もはや孤立状態にあった英賀寺内町は、秀吉の寝が入り策略も功を奏し、極めて短期間に崩されたらしい。その四ヶ月後、父・顕如の講和派と対立して最後まで籠城を続けた教如は大坂本願寺に火を放ち、ここに一世にわたって続いた中世本願寺ネットは終焉を迎えた。



「軍師官兵衛と仏教」をテーマに歴史対話の様子  
(於・亀山本徳寺・大広間 2013年1月27日)

亀山本徳寺住持・大谷昭仁(左)と円教寺執事長・大樹玄承(右)が、場敵対した信長・秀吉との攻防を話題に、当時の旧仏教と新仏教の立場の違いから、中世の社会情勢を踏まえて持論を披露した。亀山御坊楽市楽座10周年記念フォーラムのイベントとして企画され、関心のある市民約200名(神戸新聞発表)が参加して、熱心に聞き入っていた。